

半世紀の昔、我、學生にして課外活動管絃樂團の一員なりき。擔當はトランペット。その頃の逸話、時に想ひ起す。

毎年、大學夏休みに團の全員合宿あり。その年は、富士山麓なる村の小學校に數十枚の貸蒲團を集め、寢泊まりして練習す。靜かなる山村なれば、夜間の練習を遠慮せり。結果、夕食後はそこに團員集り、音樂論、戀愛談義、當時盛なる學生運動や政治を議論することとなれり、それ深更未明まで留まるところを知らず。また、田舎の早朝は自然の薰一段と爽やかにして、朝食前未だ夜も明けぬうちより女子學生を誘ひ合はせ散歩に遠出すること連日になりぬ。かくして合宿終はる頃には團員全て睡眠不足明らかなる狀況に至りぬ。

合宿最終日、食事その他にて世話してくれたる村人に感謝の意表すべく、また練習成果を試す意もありて同小學校講堂にて演奏會を催せり。普段の生活單調なる村人、生の西洋音樂を聞く物珍しさもあり、數多參集せり。

演目には、クラシック音樂に馴染薄き向きに配慮して親しみ易き曲も加へたり。中に馴染の唱歌「旅愁」あり。その主旋律、當初バイオリン、その後第三節よりトランペットパート即ち我と先輩の二名にて奏でるてふ編曲なり。

プログラム進みてその「旅愁」。指揮者出でて、聽衆に御辭儀し、我等に向ひ、氣取顔に指揮棒を振り、低音樂器、中音樂器前奏を順調に奏し始めたり。その時、急に睡魔來たるを覺ゆ。睡りて出のタイミング逃すことありてはならじ。注意喚起せむと隣席の先輩見れば既に彼、幸せ顔に睡り居り。我、かくも安らかなる彼の顔見るは初めてとしばし眺む。曲進みて主旋律「更け行く秋の夜・・・」のメロディに差しかかる。バイオリンの調べに合せ腦中にて歌ひつつ、「出」に備へ、また腦で歌ひ・・・するうちあらうことか我も眠りに落ちたるらし。バイオリンの音か細くなれるに氣付き、一瞬、はとせる時には既に曲、我等が奏すべき「こひしや ふるさと、懐かし ちちはは・・・」の部分にかかりけり。

慌てて先輩の肘を付き、彼方の指揮者を見れば、我等パート席を睨むが如き懇願するが如き表情にて、他になすすべとて無く、主旋律缺きて半端なる調べに併せ、空しく指揮棒を四拍子に刻みおり。

我等、急ぎメロディを吹き始むれども、既にして出遅れたれば、先を行く伴奏を主旋律が追ひかける様を呈し、そのズレ、誰の耳にも明らかなり。數小節の後れ取戻すことあり得べくも無く、音樂、その態をなさざりけり。我等が居睡り、曲を臺無しにしたるなり。

指揮者止むなく演奏を中斷、聽衆に詫びて後、初めより演奏仕直す儀と相成り、我が樂團、大いに面目を失ふことゝはなりにけり。勿論、聽衆はトランペットパートが、「出」に遅れしことに氣附きたれども、その理由、居睡りと知りたる、多くはあらじ。

卒業後、數多の演奏會に行けり。その都度ステージにて居睡りする人を探すが習ひなれども未だそこに氣附くこと無し。或は、舞臺までの距離遠くして見えざるのみならむ。

（平成二十九年三月二十五日受附）

